

# 文学の諸概念

大 野 真

## 1. 言語と人間存在の多層性——動物・植物・鉱物的層

この小論では、文学とりわけ文芸評論において重要となる諸概念について論じたい。私は今までにフォークナーやウェルティなどの作品に関して論文を書いてきたが、その際作品に応じてさまざまな文学理論を（やや手探りの的に）用いてきた。今回は、個別の作品を離れて、理論的な概念自体を自由に検討してみたいのである。

さて、文学が言語を媒介にした芸術である以上、文学の理論は言語に関する考察から出発するべきであろう。この点から興味深いのは、吉本隆明の『言語にとって美とは何か』及び、その内容を一般向けに分かりやすく解説した『詩人・評論家・作家のための言語論』である。吉本の言語論・文学理論における重要な業績は以下の2点だ。

（1）言語の根本的機能を対自的な自己表出（言語の価値）と対他的な指示表出（言語の意味）の二種に見定めたこと。

「人間の言葉にはふたつの側面があります。ぼくの使っている言葉をそのまま使わせてもらえば〈自己表出〉の側面と〈指示表出〉の側面です。例えば、胃が痛くなって「うっ」とか「痛い!」と思わず口をついて出たとすれば、どれかとコミュニケーションする目的で発したのではなく反射的に口をついて出た言葉です。結果としては自分の外側に何かを通じさせることになるのですが、それが目的で言葉を発したわけではありません。言葉のなかに含まれているこの種の表現を、ぼくは〈自己表出〉と呼んでいます。…もう一つの〈指示表出〉はなにかを指し示すための表現です。つまり、視覚的に景色をみてああ、きれいな景色だなといったりするものがそれです。言葉にはこのふたつの側面があります」（『詩人・評論家・作家のための言語論』76-7）。

吉本は、自己表出と指示表出の絡みから、様々な品詞を位置付けて見せた。例えば、助詞のテニヲハは自己表出を主体とした品詞であり、「コップ」などの名詞は指示表出を主体とした品詞である（『詩人・評論家・作家のための言語論』84）。

（2）文芸作品の価値を判断する物差しとして、韻律・選択・転換・喩という四つの明確な基準を示したこと。

「われわれの言語美学的考え方からすると、まずはじめに〈韻律〉が根底にあり、それから場面をどう選んだかという〈選択〉があり、表現対象や時間が移る〈転換〉ということがあります。そして、メタファー（暗喩）やシミリ（直喩）などの〈喩〉があるわけです。この四つは言語の表現に美的な価値を与える根本要素になるわけです」（『詩人・評論家・作家のための言語論』160）。

この四つの基準は、日本の伝統的文芸である短歌や俳句を分析する際にとくに有効である。短歌や俳句は内容的にはそれほど大したことを言っているわけではないにもかかわらず、韻律・選択・転換・喩という点からは相当高度なことをしているのだ。桑原武夫は『第二芸術論』で短歌や俳句の内容の乏しさを批判したが、そのような批判に対しても、日本の詩は「内容は乏しいが、しかしいい詩だというしかしかたがない」（『詩人・評論家・作家のための言語論』170）と弁護することが可能となるのだ。

さらに興味深いのは、自己表出と指示表出の言語論が、『詩人・評論家・作家のための言語論』においては、人間がその内部に抱える植物的あるいは動物的要素と結び付けて再解釈されていることだ（『詩人・評論家・作家のため

の言語論』78-79)。まず、自己表出語は植物神経系の内臓と関わる。自己表出は、例えば心臓がドキドキして思わず「あっ」といったりするような、内臓に関係付けられる心の表現である。そして、人間の内臓は脳で意図して動いているわけではなく、植物神経系によってひとりで動いているのである。それに対して、指示表出は、眼や耳など動物神経で働いている感覚器官と結びつくのだ。

人間がその内部に動物的、さらには植物的な存在を抱えていることは、文学作品の中で様々な形で具体的に現れている。まず、動物との関わりで言えば、フォークナーの『サンクチュアリ』において頻出するような、人間（とくに欲望に取りつかれた人間）を動物に喩える比喩がある。<sup>注1</sup>

人間と動物との間の相互転換が比喩のレベルではなく現実（ただし小説的現実）の中で実際に起こってしまった例が、カフカの『変身』である。また、柳田國男の『遠野物語』第69話には馬と夫婦になった娘の物語が語られ、フォークナーの小説『村』における人と牛との恋を連想させる。これらの例は、人間の内部にある動物的存在を示唆し、「人間」という固定概念を突き崩すのである。<sup>注2</sup>

動物的レベルよりもさらに深層には、植物的なレベルが存在する。植物的なイメージについての哲学的考察は、ドゥルーズの『プルーストとシーニュ』にある。ドゥルーズは、「プルーストにおいて、植物のモデルは動物的全体性のモデルにとって代わっている」（*Proust et les signes*139）ことを指摘する。動物的モデルでは中枢神経系が発達しているため全体が部分を支配するのだが、植物的モデルでは部分が全体からより独立しており、自由度が増すのである。植物的モデルから人間を見る場合に、人間という概念はさらに流動的になるであろう。

人間を植物に喩える比喩の重要な例として、フォークナーの作品、とくに『土埃にまみれた旗』がある。この小説の中では女性が花に喩えられている。花の重要な特徴は、根を四方に伸ばして繁殖することであろう。日本の中上健次はフォークナーの強い影響を受けた作家として有名であるが、とくにこの点を強調して、「繁殖する南部」と呼んでいる。アメリカ南部のフォークナーの作品が根を伸ばし繁殖することにより、その影響を受けたラテン・アメリカ作家や日本の中上達の作品群が生まれたのだ。

人間を植物に喩える際には比喩が用いられるが、比喩の特徴も増殖することである。例えば、スーザン・ソントグは、ロマン派の文学における「結核」の隠喩を取り上げ、「19世紀文学には、殊に若い人が結核によって苦しまず、怖がらず、美しく死んでゆく描写が多い」（ソントグ23）と指摘している。こうしたイメージが現実の結核と離れ独り立ちして増殖するのだ。吉本が「日本語の詩の言いまわしは、はじめはすべてメタファーでした」（『詩人・評論家・作家のための言語論』130-31）というように、比喩は論理的な言語に比べて言語の古層に位置付けられるべきものである。比喩は人間が内に抱える動物的・植物的レベルの層を示唆すると共に、生物のように自己増殖する言語の根源的生命力を表わすのだ。<sup>注3</sup>

ロラン・バルトは、古典文学の文体の特徴を「透明体」として定義した（バルト7）。つまり、「古典主義芸術にあっては、すっかり出来上った思考が、それを《表現し》、《翻訳する》コトバを産む」（バルト43）のであり、その点で古典主義の散文と詩は数学の言語に似ている（バルト44）。しかし、言語の生命が増殖にあるのならば、透明な古典的文体はむしろ特例的なものであって、言語の透明性は言葉の増殖により突き崩されて不透明なものとならざるを得ない。あるいは、科学が目標とする、情報を正確に伝える道具としての言語と対比してもいい。言語の役割が情報を正確に伝えるための媒体に過ぎないのならば、言語の多様性（例えば、各国の国語や方言）などは余計なもので、単一の普遍的な言語があれば十分だということになってしまうであろう。しかし現実にはさまざまな国の言葉や地域の方言が存在する。しかも、柳田國男によれば、言語の感覚は地方においてより発達しているものなのだ。「繊細をきわめた都市人の色彩香味の趣味と対立して、ひとり言語の感覚のみが、やや過敏というまでに田舎には発達している」（『口承文芸史考』72）のである。

アメリカ南部の作家であるフォークナーは、方言を効果的に用いると共に、地域共同体で生じる「うわさ」を小説世界形成上での欠かせない要素としている。「うわさ」こそ、現実を離れて言葉が増殖し多様化する例の最たるものであろう。文学の言語はこのような多様性を無視してはならない。

さて、人間には、植物よりもさらに根源的な層として、物質的なレベル——鉱物的な層——が存在する。『サンクチュアリ』では人間を機械に喩える描写が多々見られるが、これにより、人間が持つメカニズム的側面、生命が基盤とする無機的物質の側面が暗示され、不気味な効果をあげている。人間と機械との類縁性は、SFのジャンルにおいて、アンドロイドやサイボーグのテーマでおなじみである。この点で注目すべき作品は、筒井康隆の初期中篇『幻想の未来』だ。この作品の中では、意識が無機的世界にまで拡大されて、エロティシズムのテーマが人間界だけではなく宇宙的な鉱物・物質界のレベルで扱われている。

言語が根本的に持つ比喩的機能は、人間存在が内に抱える動物的・植物的、さらには鉱物的な層を明らかにする。つまり、人間は単一の層しかない存在なのではなく、複数の層からなる複層的な存在なのであり、その複層性を明らかにするのは言語の力なのだ。

## 2. 「人間」という概念の拡大

「文学」という芸術を特徴付ける二つの要素は、「人間」と「言語」であろう。文学は言語を媒介とするものだし、文学は人間を扱うということは（皮肉を込めた批判を受けながらも）よく主張される。私も、個人的には、文学は人間を主題とすべきものと考え、文学が他の娯楽ジャンルに比して純粋な娯楽性という点では劣りながらもなおかつ重要であるのは、文学がほかならぬ「人間」を扱うからではないだろうか。

しかし、その「人間」という存在は固定した概念で考えてはならず、その多様性を考慮する必要がある。つまり、「人間」という概念は常に問い直され、拡大されているのだ。

アヴァンギャルドの立場から、「人間」という概念の見直しを図った批評家は花田清輝である。代表作である『復興期の精神』では、量・函数・動力学といった数学的・物理学的概念が導入され、人間をより抽象化されたレベルで考える試みがなされている（花田 11, 117, 131）。例えば、花田は人間の社会集団を数学の群論の比喩によって考察しているのだ（花田 122）。

現代の西洋において、人間という概念の根本的な再検討を行ったのはミシェル・フーコーである。彼は、『言葉と物』において、西洋の学問を生み出した認識論的前提であるエピステーメを研究した。そして、「人間」という概念が最近発明された歴史的産物で「2世紀とたっていない一形象」（フーコー 22）に過ぎず、いまや歴史的役割を終えて「消滅」（フーコー 408）しようとしているのだと論じた。

フーコーが、「人間」の終焉と共に、言語の持つ原始的な力を強調していることは興味深い。ヘルダーリン、マラルメ、アルトーなどの文学は、17世紀以降欠落してしまった「ずっしりとした、そして人を当惑させずにはおかぬ、言語の実在」（フーコー 103）を体現しているのだ。つまり、先ほどの比喩の例で述べたように、言語の持つ根源的な力は人間存在の内包する多層性を示唆し、一枚岩的な「人間」観を解体させるのである。

このような「言語」と「人間」との緊張関係をよく見抜いていたのは、吉田健一である。『英国の近代文学』において、吉田は近代文学の出発点をポーに見据える（吉田 9）。ポーは作家であると共に批評の原理を確立した人間である。批評とは方法、つまり言葉の工夫、言葉の自意識のことだ。「彼はヨオロッパの文学史の上では最初に言葉に文学の根本を見て、言葉というものの性質について研究し、実験することに彼の天才を費した」（吉田 13）。ポー以後の近代文学は、批評性つまり言語に対する自意識と切り離せず、ついにジョイスに至って言語の実験性は極まったのである。

しかし、吉田は「文学の形式で言葉が凡てであると言えないのは小説だけである」(吉田 250)として、小説の本領をむしろ「人間」の側におく。この点で吉田はジョイスの実験的作品に対して批判的であった。「意識の流れ」の描写も、それら意識の諸断片を統一すべき「人間」がなければ、そこに描かれる現実が「泥」あるいは「泥沼」のようなものになってしまうのである(吉田 270, 280)。しかし、現代文学はジョイスの方向へ向かってきたのであり、言語実験(時には不毛な言葉遊びも含む)の果てに「泥」と化すことも恐れずに、伝統的な人間観を解体させてきたのではないか。

### 3. 周縁性へのまなざし

さて、「人間」という概念を拡大させるにあたって、まずは人間存在の持つ多様性を考慮しなければならない。そのためには、従来の人間観では周縁的なものとされてきたような存在を新たに取り組んでいく必要がある。

その一つの手がかりは、柳田國男の民俗学であろう。柳田は、近代化・中央集権化の過程の中で忘却されがちだった存在に目を向けさせる。例えば、中央における文字の文化に対して文字化されていない口承文芸を、あるいは、中央の標準語に対して田舎の言葉を強調する。方言も口承文芸も多様なヴァリエーションがあることをその特徴とするが、増殖する多様性こそが言語の生命力を示すのだ。

また、柳田は、白痴や幼児・女性(巫女)といった周縁の人間にも焦点を当てて見せる。とくに、巫女の例において分かるように、柳田は異常心理や超感覚、超常現象を数多く扱っている。つまり、柳田には異世界への憧れがあるのだ。『海上の道』において柳田は竜宮(ニルヤ)について論じ、それを「根の国」あるいは「死者の国」と関連付けている(『海上の道』63, 98, 125)。こうした異世界は我々の存在の「根」つまり根源に位置するものであろう。柳田は日本民族の起源を探求しようと試みたが、それにも現世を支えるより根源的な世界への憧れがある。

柳田は地方性・白痴・幼児・巫女などを、中央集権的な文字文化に対比するかたちで強調した。西洋においても、20世紀には、西洋・正気・大人・男性を中心に置く人間観が見直しを迫られている。そして、(柳田の強調した地方性・白痴・幼児・巫女と対応させるように言うならば)非西洋・狂気・少年・女性といった従来周縁的であった存在が目まぐるしく注目されている。

西洋と非西洋的要素の混在といった点で興味深いのはアメリカである。アメリカは、奴隷あるいは被征服民族としての過去を負う黒人やネイティブ・アメリカンといった非西洋的存在をその内部に抱えているのだ。少年から大人への成長過程を「同一性」という概念をキーワードにして論じたのはエリクソンだが、彼は同時に、アメリカ合衆国における黒人やスー族にとって集団的同一性の形成が非常に難しいことも指摘している(『幼児期と社会』(上) 192, 311-2)。奴隷あるいは被征服民族としての歴史のため、集団的同一性の基盤となるべき理想化された共通の過去を奪われてしまっているからだ。

非西洋的視点の導入という点で重要なのは、パレスティナ出身の比較文学者サイードの著書『オリエンタリズム』である。彼はオリエンタリズムを西洋の産物として捉え、「オリエンタリズムがともかくも意味をなし得ているのは、東洋のおかげではなく、むしろ西洋のおかげなのである」(『オリエンタリズム』(上) 60)と論じる。つまり、オリエンタリズムといった非西洋的存在の捉え方自体も、従来は西洋中心的な視点から歪められていたのである。例えば、イギリスに支配されたインドの現状を嘆くマルクスの見解さえも、「ロマン主義的な救済事業の一要素としてのオリエンタリズム」(『オリエンタリズム』(上) 405)という枠組みに従っているのだ。西インド諸島出身のファノンも植民地側の視点からの西洋中心主義への問い直しを迫り、「ヨーロッパの福祉と進歩とは、ニグロの、アラブの、インド人の、黄色人種の、汗と屍によってうちたてられた」(ファノン 95)と痛烈な批判をしている。

「少年」という存在も興味深い。理性的な大人を中心とした人間観に従えば、子供は大人への成長過程に過ぎぬ未熟

な存在、として位置付けられてきた。しかし、少年それ自体に独立した価値を認め、「文学とは、ついにふたたび見いだされた少年時のことではなかろうか」（バタイユ 15）と論じたのはバタイユである。つまり、大人は共通の利害に根ざして未来を配慮しつつ生きるのに対して、少年は現在の瞬間に生のエネルギーを衝動的に乱費する。そうした少年の刹那的な姿にこそ、文学の本質である「崇高な陶酔」（バタイユ 30）があるのだ。

このようなエネルギー論的な観点は、「性」の問題の考察にも応用され得る。子供の持つ倒錯性を「多形倒錯」という用語を用いて指摘したのはフロイトである。大人の性的エネルギーは生殖という目的に添って編成されているが、子供の性的エネルギーは生殖には束縛されず、無目的に、それゆえ倒錯的と見なされる具合に表面化するのである。ちなみに、谷崎潤一郎は少年の世界を描くことを得意とするが、例えば初期作品の「少年」では少年少女の変態性欲の秘密を描いている。谷崎はまた、「子供の王国」という作品において、子供達が自ら階級制を敷き独自の貨幣を発行して自分達の王国を築いてしまう様を描いているが、子供は大人とは独立した世界をもっているとの認識が谷崎の少年物を魅力的にしている。

子供は大人とは独立した存在なので、大人の世界を支配する慣習や偏見からは比較的自由であり、逆にその批判者ともなり得る。マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』では、少年ハックが文明社会の束縛を逃れて黒人ジムと共に自然の中で冒険をするが、少年と黒人との心の交流が南部奴隷制社会への批判となっている。

エリクソンによると、少年は非常に不安定で流動的な存在である。「成長するということは、それぞれ違う速度で動くいくつかの異なった部分に分割されることを意味する。成長期の少年は自分の分裂した心はいうまでもなく、ひょろひょろと伸びていく自分の身体をも制しかねるのである」（『幼児期と社会』（上）69）。この流動的な存在である少年が如何にして大人としてのアイデンティティを獲得していくかという成長のプロセスをエリクソンは扱った。しかし、大人になるという目的からいったん切り離して少年の世界それ自身に独自の価値を認めることにより、少年の流動性を大人世界の固定した人間観に対する批判概念とすることができるだろう。

さて、「少年」と共に「女性」もまた再発見され既成概念を問い直されている存在である。最近のフェミニズムの傾向として、例えばバトラーが主張しているように、「女性」を首尾一貫した安定した存在としてではなく、常に新たに検討され直すべき「進行中」の存在として考えていこうとする姿勢がある（バトラー 20, 25, 72）。つまり「女性」を固定したアイデンティティとしては捉えず、生成変化する流動性を強調するのである。これは男性作家を見直すことにもつながり、例えばブルーストなどの同性愛的傾向のある作家において顕著であるが、「書く」という行為を通じて男性の作家は「女性への生成変化」を行っているのだ（坂野 202）。つまり「女性」と「男性」双方の枠組みを二項対立的に固定化せず、流動的に見ていこうとするのである。

男女間の区別を基にした異性愛や結婚制度に対して、フェミニズムが同性愛に注目するのも、男女の固定化された枠組みを突きくずそうとする試みの表れである。さらに、男性間の同性愛に比べて女性間のレズビアンが対比され、前者が「制度によって裏づけられる社会装置」であるのに比べ、後者は「制度によって否定され、制度の隙間で構築される個別的で私的な出来事」とであるとされる（竹村和子 303）。社会システムの網の目から漏れた私的な存在こそが、既成の枠組みを批判する機能を果たすのだ。フェミニストの文芸批評家は「私生児」が作品中で果たす役割に注目するが、結婚制度によって排除された「私生児」はシステムを逆転させる可能性を秘めた「私」的存在なのだ。例えば、メルヴィルの『ピエール』においても、主人公ピエールの異母姉である私生児イザベルの出現によって物語の展開が急変し、「虚実の転倒」（伝田 59）が引き起こされるのである。

また、フェミニズムは、男性中心的な文学史の視点からは周辺部に追いやられていた作品にも光を当てる。例えば『トムおじさんの小屋』のような 19 世紀の大衆的家庭小説あるいは感傷小説も、「女性によって、女性のために、女性について書かれることを主な特色とするジャンル」（トムキンス 86）として再検討されるのだ。

女性の言葉にもフェミニズムは興味深い考察をしている。女性は抑圧された存在であるため、言葉の十分な利用を拒まれ、「沈黙や上品な言いまし、あるいは回りくどい言い方の中に無理矢理追いかまれてきた」(ショウォールター 317)のである。逆にいえばこのように抑圧された表現や沈黙にも重要な機能があるのだ。

さて、女性の言葉の例からもわかるように、周縁的な存在を扱う場合、秩序だった言語体系ではなくむしろ断片やエピソードが重要なものとなる。この点を強調したのはイタリアのマルクス主義者グラムシである。グラムシは「従属的社会集団の歴史は、必然的に、断片化された、そしてエピソード的なものであらざるをえない」(グラムシ 110)という。つまり、従属的社会集団の民衆の世界観は多様であるため、「その〔フォークロアのうちに含蓄的に表現されている〕世界観は練成された体系的なものではない」(グラムシ 124-5)のである。

フランスのマルクス主義者アルチュセールも、「例外」や「特殊化」といった、体系からはみ出す部分の重要性を強調している(アルチュセール 171-2)。つまり、体系に吸収され消え失せてしまうことのない「差異」が重要なのである(アルチュセール 164)。

マルクス主義は資本主義社会を総体的に解明するための体系的な理論である。ルカーチはマルクス主義の長所としてその総体性つまり「部分に対する全体の全面的、決定的な支配」という観点を挙げ、近代社会の中で総体性という観点を表わすのは「諸階級」であるとしている(ルカーチ 67, 69)。しかし、こうした強力な総体的システムであるマルクス主義の理論の内部で、断片性や例外・差異に重点を置いた解釈が存在することは注目に値する。

#### 4. 夢の世界——逆転のダイナミズム

さて、秩序だった体系を昼の世界とするなら、そこからはみ出す周縁的な世界は夢に喩えられるであろう。夢の世界は一種の狂気の世界である。

夢に関してはフロイトをはじめとして、様々な興味深い考察がある。例えばブルトンは夢と現実が「超現実」の中で溶け合う日がいつか訪れることを信じ(ブルトン 25)、夢の力によって現実世界を革命的に転倒させることを図った。また、夢の持つ啓示性はユングの文芸理論の下地となっている。ユングは文芸作品を心理的な作品と幻視的な作品の2種類に分け、幻視的な作品の持つ啓示的な力を日常生活的な心理描写よりも深いものとした。幻視的な作品の例としては『ファウスト』の第二部があるが、そこには「人類以前の太古の深み」からの原体験が、個人をはるかに超出した「集合的無意識」が現れているのである(ユング 63, 78, 86)。

しかし、夢の持つダイナミズムを最もよく見抜いていたのは、フロイトさらにはバフチンであろう。

フロイトは、『精神分析学入門』の中で、夢においては一見対立する要素が並存することを指摘している。こうした対立物の並存は古代の言語においても見られ、夢の太古的性格を示すものである。例えば、「もっとも古いことばでは強いー弱い、明るいー暗い、大きいー小さいというような対立は、同じ語根によって表現されている」(フロイト 238)のである。対立物が並存するということは、対立物が逆転する可能性もあるということである。夢の中では、反対のもので意味が代理されたり、状況が逆になったり、人物間の関係が逆さまになったりして、まるで「あべこべの世界」にいるようなのだ(フロイト 249)。夢の世界は、『マクベス』で三人の妖女が言うように、「きれいは汚い、汚いはきれい」という逆転の世界なのだ。

バフチンは、対立する要素の並存と逆転をカーニバル的世界として把握した。カーニバルの祝祭空間は「二元一体的構造」(『ドストエフスキーの詩学』 254)をしており、「誕生と死」といった対極的要素が並存する。しかも、カーニバル的生とは通常の軌道を逸脱した生であり、「あべこべの世界」(『ドストエフスキーの詩学』 248)である。そして、バフチンはドストエフスキーのカーニバル的時空概念を夢に喩えているのである(『ドストエフスキーの詩学』 299-300, 340-1)。

## 5. 雑種性とシステムの変容

夢の世界は、対立物が並存する多様性を特徴とし、しかも逆転の可能性というダイナミズムを秘めている。

多様性のダイナミズムを強調している点がバフチンの文芸批評が持つ大きな魅力であろう。例えば、バフチンはフィードリングやスモレットなどのユーモア小説を評価する。これらのユーモア小説には、「言語的多様性」（『小説の言葉』84）が見られるからだ。詩が単一的で「特殊な唯一の詩の言語」（『小説の言葉』58）を理念とするのに対し、小説の文体は「諸文体の結合」（『小説の言葉』15）の中に存在する。小説は雑多な多様性をその特徴とするのであり、小説の持つ根源的な力は猥雑な多様性に由来するのだ。

小説の内包する多様性のダイナミズムは、既成のシステムを突き崩すような暴力性を持つ。システムと暴力の関係を論じた優れた論考としてベンヤミンの「暴力批判論」があるが、彼は神話的暴力と神的暴力という二種類の暴力を区別する。「いっさいの領域で神話に神が対立するように、神話的な暴力には神的な暴力が対立する。しかも、あらゆる点で対立する。神話的暴力が法を措定すれば、神的暴力は法を破壊する。前者が境界を設定すれば、後者は限界を認めない」（ベンヤミン 59）。言い換えれば、神話的暴力とは制度が内包する暴力であり、システムを維持するための暴力（例えば軍隊や警察、法律による刑罰）であるのに対して、神的暴力とは、外部から侵入して既成のシステムを突き崩し、新たなシステムへと蘇生させるような聖なる力である。こうした神的暴力の持つダイナミズムこそ、文学のダイナミズムへとつながるものだ。

システムと暴力的ダイナミズムとの関係は、科学技術時代における文学の役割を考える上でも参考になるだろう。科学とは知識のシステムであり、がっちりとした構造を持っている。現代の情報社会では、その構造はコンピュータの二進法（0と1という対立項の組み合わせ）を大きな柱としている。この二つの対立項の組み合わせという考え方は非常に魅力的で、人文科学系の学者でもいわゆる構造主義者たちは、対立項的な考えを理論の基盤としている。例えば、言語学者のヤーコブソンは、基本音素における二分法の原理を通信理論のビットに対比させ、文化人類学者のレヴィ＝ストロースも、トーテム動物における《たかーからす》の区分といった「対立する項の結合」や「対立するものの対」という二項対立を構造人類学の理論的核としている（レヴィ＝ストロース 144, 146）。

しかし、二項対立のみで世界が記述し尽くせるわけではない。例えば、九鬼周造は日本独自の「いき」の美学の構造を研究したが、「いき」の本質をむしろ平衡的構造を軽く崩すことに見ている。「まず、全身に関しては、姿勢を軽く崩すことが「いき」の表現である」（九鬼 50-1）。とりわけ文学の言語は既存のシステムや構造を突き動かし、変容させること——つまり「異化」することにその生命がある。例えば、大江健三郎はトルストイ作品の異化作用に注目して次のように言う。「トルストイが、いかになにもかもをも『異化』するか。在来あるものの見方に対して、いや事実はそのようなものではないものとして、現にこのようにあるのだ、といかに執拗な否定をくりかえして『異化』を実現しつづけるか」（大江 8）。<sup>注4</sup>

システムに生きた人間という要素が侵入することにより、システムが変容し、硬直化を免れる。文学は言語の力によって人間の概念を拡大し、流動化し、多層化させ、全体には吸収し尽くされ得ぬ「個」としての力を明らかにする。文学の力によってシステムは変容を迫られるが、それはシステム自体を多様化させ豊かにするであろう。科学時代における文学の意義はとりあえずその点にあると思う。

## 注

（注1）こうした動物への比喩は差別的な視点を内包していることをフェノン是指摘している。すなわち、植民地における原住民は貶められ動物的存在とされてしまうのだ。「ときとしてこのマニ教的善悪二元論は、その論理の果てにまで至り、原住民を非人間化してしまう。文字どおり動物にしてしまうのだ。じっさい原住民に

について語るコロンの言葉は、動物学の言語である」(フェノン 42)。

(注2) ドゥルーズ=ガタリは、カフカにおける動物への変身を「脱領土化」の例として捉える (*Kafka*23)。つまり、人間は「領土」が明確な固定的存在ではなく、つねに自己の領分を超えてゆき、動物にも転換可能な流動的存在なのだ。

(注3) 「詩は他の詩からのみ作られ、小説は他の小説からのみ作られる」(Frye97) とするフライは、「典型的な反復するイメージ」(Frye99) としての原型が増殖して様々な作品を生み出し、「自足した文学的宇宙」(Frye350) を形成していくと論じている。

(注4) なお、科学史・科学論的な立場から、科学自体も実は閉じた構造ではないことが主張されている。例えば、佐々木力は、ガリレオの力学的自然像とマキアヴェッリの力学的政治原理との深い類縁性を指摘している(佐々木 50)。また、パラダイム論で著名なクーンは、科学は決して「単層的(monolithic)」で統一されたものではなく、むしろ科学は「がたがたの (ramshackle)」構造を持ち、その様々な部分の間の結合はほとんどないことがしばしばであると論じている (Kuhn49)。つまり、一見整然とした揺るぎ無いシステムのように見える科学も、人間の営みの産物である以上、政治や経済的条件などの歴史上の制約を受けるし、システム内に雑然とした部分を抱えているのである。

#### 引用文献一覧 (洋書はアルファベット順、和書は 50 音順)

- Deleuze Gilles, Felix Guattari. *Kafka: pour une littérature mineure*. Paris: Éditions de Minuit, 1975.
- Deleuze, Gilles. *Proust et les signes*. Paris: PUF, 1986.
- Frye, Northrop. *Anatomy of Criticism*. Princeton: Princeton UP, 1971.
- Kuhn, Thomas S. *The Structure of Scientific Revolutions*. 3rd ed. Chicago and London: U of Chicago P, 1996.
- アルチュセール, ルイ, 『マルクスのために』河野健二・田村俣, 西川長夫訳, 平凡社, 1994 年。
- 海老根静江・竹村和子編著, 『女というイデオロギー』, 南雲堂, 1999 年。
- エリクソン, E. H., 『幼児期と社会』(上) 仁科弥生訳, みすず書房, 1977 年。
- 大江健三郎, 『小説の方法』, 岩波書店, 1993 年。
- 九鬼周造, 『『いき』の構造』『『いき』の構造他二編』, 岩波書店, 1979 年。
- グラムシ, アントニオ, 『知識人と権力——歴史—地政学的考察』上村忠男編訳, みすず書房, 1999 年。
- サイード, エドワード・W, 『オリエンタリズム』(上) 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳, 平凡社, 1993 年。
- 坂野明子, 「書かれなかった〈男〉と〈女〉の物語——『誰がために鐘は鳴る』の背後を読む」海老根・竹村 189-206。
- 佐々木力, 『科学技術と現代政治』, 筑摩書房, 2000 年。
- ショウォールター, エレイン編, 『新フェミニズム批評』青山誠子訳, 岩波書店, 1999 年。
- ショウォールター, エレイン, 「荒野のフェミニズム批評」ショウォールター 295-343。
- ソントグ, スーザン, 『隠喩としての病』富山太佳夫訳, みすず書房, 1982 年。
- 竹村和子, 「〈悪魔のような女〉の政治学——女の『ホモソーシャルな欲望』のまなざし」海老根・竹村 295-312。
- 伝田晴美, 「女の変容と作家の呪縛——『ピエール』におけるアレゴリーの崩壊」海老根・竹村 54-68。
- トムキンス, J・P, 「感傷の力——『トムおじさんの小屋』と文学史の政治学」ショウォールター 83-122。
- バタイユ, ジョルジュ, 『文学と悪』山本功訳, 筑摩書房, 1998 年。



## 文学の諸概念

- バトラー, ジュディス, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳, 青土社, 1999年.
- 花田清輝, 『復興期の精神』, 講談社, 1986年.
- バフチン, ミハイル, 『小説の言葉』伊東一郎訳, 平凡社, 1996年.
- , 『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳, ちくま書房, 1995年.
- バルト, ロラン, 「零度のエクリチュール」『零度のエクリチュール 付・記号学の原理』渡辺淳・沢村昂一訳, みすず書房, 1971年.
- フーコー, ミシェル, 『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民・佐々木明訳, 新潮社, 1974年.
- ファノン, フランツ, 『地に呪われた者』鈴木道彦・浦野衣子訳, みすず書房, 1996年.
- ブルトン, アンドレ, 『超現実主義宣言』生田耕作訳, 中央公論新社, 1999年.
- フロイト, ジグムント, 『精神分析学入門』懸田克躬訳, 中央公論社, 1996年.
- ベンヤミン, ヴォルター, 「暴力批判論」『暴力批判論他十篇——ベンヤミンの仕事1』野村修編訳, 岩波書店, 1994年.
- 柳田國男, 「海上の道」『柳田國男全集一』, 筑摩書房, 1989年, 7-296.
- , 『口承文芸史考』, 講談社, 1976年.
- ユング, C・G, 『創造する無意識——ユングの文芸論』松代洋一訳, 平凡社, 1996年.
- 吉田健一, 『英国の近代文学』, 岩波書店, 1998年.
- 吉本隆明, 『詩人・評論家・作家のための言語論』, メタローク, 1999年.
- ルカーチ, ジェルジ, 『歴史と階級意識』城塚登・古田光訳, 白水社, 1991年.
- レヴィ＝ストロース, クロード, 『今日のトーテミズム』仲沢紀雄訳, みすず書房, 1970年.